主張一題

公園法

林學博士 上原敬 二

一國の公園全般に通じて施行され得る法律は世界何れの國にも未だ存しない。國立公園とか、天然保護區域に就ては獨、瑞、米等に法律はあるも。それは公園の性質意義が然らしめるのであるが然し我國の如き風景國に於て殊に人口稠密を極め、天然破壊の著しい國に於ては國法として一つの「公園法」なるものが存しなければ困るのである。

名稱は單に公園法と云ふ、然し實際にその影響の及ぶ所は極めて廣汎である、各般の土地産業、都市計畫、社會施設、保健問題、國防問題に通曉しなければその眞骨頂に觸れた立案は出來ないが然しかゝる重要問題をいつまでも放任するのは前述の如く國土保安、國土裝景、天然保護の上から見て面白からざる現象であるので一刻も早くかゝる機運を醸成したいものである。

今それについて私案を述べればかゝる法律は從來全然

なかつたので明治六年大政宣布告なるものが——憲法制定、法律制定以前のこと——あるのみなので舊法などに囚はれずして却つて大膽に立案し得る點はあるが然し監督の及ぶ所は左の四大綱目である

國立公園

府縣市町村立公園（公有公園）

都市公園（都市計畫法施行都市の都市計畫區域にあ

るもの）

私有公園（兒童遊園を含む）

國立公園關係より相關聯して生ずる交渉としては森林法、河川法、水力電氣法、道路法、砂防法、狩獵法、史蹟名勝天然記念物保存法、鐵道關係法規、諸種の警察令等の特殊法に及ぶ、就中保安林、風致林、神社境内林、保護林、天然保護區域に關する法律は密接なる關係を有する。國立公園に關する疑義を闡明し、それ等の保護林

10
風致林、天然記念物に對する明なる解決を致した上でよく相互に不理解のなからしむる必要がある。

公有公園にあつては多くの場合監督權の行使であるが本園の目的は公園本來の意義である利用、享樂にあるのでその邊を考察して立案しなければならぬ、この中には都市計畫法を施行しない都市の分を入れるも差支ないこの種には山嶽あり、河川あり、海岸あり、従つて海水浴場、溫泉、旅館、交通機關の問題にまで著しい關係を生ずる、現在に於て奈良公園の如き、其他松島、岡山栗林、金澤の如き大規模なる縣有公園も少くない、町村公園の如きは便宜上府縣廳に於て直接監督するのも差支はないと思ふ、この種府縣立公園監督の法律として模範視されて居るのは大ボストンを圍む一帯の公園監督法としてマサチュセツツ州の公園法であり、大都市區域に關聯して府縣立公園監督法としては矢張ボストン、ピッツバーク、タコマ、ニューヘヴン諸市制定の公園法がある。

次に都市公園としては本來都市計畫法施行の市にあるては地方委員會を初めとして相當の機關がある爲め、その都市計畫區域に於ける公園に就てはかゝる機關の手を経て凡て立案、經營、管理せしめるのであるから別箇の考を以て公有公園と切り離して考へたい。

私有公園の問題は多くは遊園地の如きものであるから公園本來の機能から見て寧ろ兒童遊園に近いものであるその經營の方法、施設の良否が果して差支ないかどうかは今日監督官廳にあつても明に分つて居ないと云つても過言ではなからう。

以上の外更に御料地にして公園たるもの、狩獵場等あるも之れは帝室林野局にあつて別に立案するものとして國の分とは別にする。

前記の如き内容に加へて神社境内の取締、兒童遊園の監督、史蹟地保存、名園保護等の問題も生じて来る。

果してかゝる施設に對し監督官廳は盲目であつてよからうか、農林省山林局、内務省衛生局、地理課、其他關係ある方面に俟つて或は遞信省、時に文部省、鐵道省を煩して解決に盡さねばならぬ問題も生じて来る。

以上公園法に關聯しても生じて来るが然し單獨に既に今日にあつて識者の眼をひそましめるものは風致區建築物法の不備に基く天然風致の破壊である。市街地に建築物法を布き、風致區、美觀地區等の分類を試みて都市修飾に資するならば國土の美を誇とする風致地方でも同様でありこゝには須らく醜惡なる建築の新設を禁止すべきではあるまいか。

然るにこれは外觀、様式、體裁の問題である。趣味を異にする建築技師の監督と裁量とに委しては決して本來の目的を達し得ない、須らく法律として——詳細に一々様式の末節まで檢定することは勿論出来ないが——その附近の環境に對し不調和ならざるやう、その地方獨特の特色を破壊しないやう法文の字句を考へるならば必ずしも難事ではあるまいと思ふ。

現在に於てもキアナダ國立公園局はその有數の國立公園バンフ及びジャスパーの兩所に都市計畫に準ずる一種の風致區計畫を布きその役員の内にはかくの如き方面の技術に通曉する者を抜いて設計と事務とに當らしめて居る、合衆國の例に見てもヨセミテの溪谷、ハットスプリングスの溫泉都市には立派な風致區委員が任命されて居てその取締に任じて居るし、ドイツのウイスバーデンやバーデンバーデンにあつても同様に風致問題に留意して建物にある制限を加へて居る。

かくの如き問題が森林と關聯して來ると茲に風致林の見解について相違を生じ往々にして誤解を生ずるのである。風致林とは保護林とか禁伐林などとは大に趣を異にする、森林の中に住宅が出来、便所が建ち、四阿が設けられ、賣店に人を呼ぶことはそれ自身何等風致の問題を

惹起しては來ない、唯それ等の施設、建築の様式、體裁外觀が四周の景致に合致するや否やの問題である。それには建築家の頭に汎く常識的に土地適合、風致順應の精神から設計を取扱ふ慣習がつけばよいと思ふ、山間自然の郷に洋臭紛々たる建物を設け、靜寂なるべき天然境に靜閑を破るが如き執拗なる色彩を用ふるが如きは避けたいものである。到る所の風致區に於て建物が問題視されるのを聞くのは目覺めたる現象として改良進歩の前程となりつゝあるを思へば將來何等の機會に識者の注目を惹くであらうと思ふ。

公園法の中で私有庭園又は私有公園、公開園の利用から兒童遊園の問題に觸れて來るのは當然であるがこれは唯單なる公園技術と云ふ側からのみ見ることは出來ないので同時に社會事業的見地、殊に社會教育としての立場からも考へねばならぬ、兒童保護、兒童體育の如きものに係るので學務、社會、保健、教育等の部門に著しい關係を生ずるのでアメリカの如く公園と切り離して獨立の取扱に出づべきであるか、乃至は公園の内に包括せしめるのであるかは大に研究問題であると思ふ。

本會は眞に學術と實際との融和を圖る意味より此問題の實現に當つては大に努力したいと思ふ。